

1 目的

本校は、明治からの学校で、近くには福島正則公生誕地の碑もあり、日頃から地域と深いつながりをもっている。地域の方に温かく見守られ、協力していただきながら学校教育を進めており、地域の力は、本校になくてはならないものになっている。そこで、より地域との連携を図り、地域の力を生かすことで、児童の自己肯定感を高め、児童をより健やかに育てていきたいと考えている。

また、変化の激しい現代社会を生き抜く力を児童に身につけさせることは、今日の教育の重要な課題であるとする。状況に合わせた目標をもち、前向きに考え行動するには、集団を包み込む、豊かな心の醸成が必要であるとする。

2 内容

(1) 地域との連携

ア Project MASANORI (新規事業)

本校の近くには、福島正則公の生誕地や菊泉院という菩提寺がある。しかし、過去にいくつかの村が合併して正則村ができ、その学校として正則小学校と名付けられたこと、正則村という名前の由来は福島正則公の生誕地であったことなどは、ごく一部の児童にしか知られていなかった。せっかくこの学校にいるのだから、福島正則公のことを少しでも知って卒業していつてもらいたい。

そこで、あま市のキャラクターとしてあま市ものしりジュニア検定などで使われている、親しみやすい『ふく王くん』を活用して、福島正則公に関わり、親しむ活動を年間を通して行うことにした。



ふく王くんピザ

① 菊泉院の山田泰信住職を招き、朝礼時に福島正則公の概要を全校児童に話していただいた。

② 朝礼で、歴史上の人物としてさまざまな肖像画で描かれていることやあま市のキャラクターである「ふく王くん」を紹介した。

③ 紙粘土で作った、ふく王くんの半立体レリーフを校長室の前に掲示した。

④ ふく王くんの福笑い（ふく王笑い）を朝礼で紹介し、立体福笑いを校長室前で自由にさわれるように掲示した。

⑤ 1年生対象に、ふく王くんの塗り絵を行った。

⑥ 3年生が、城主だったこともある清洲城へ遠足に行った。

⑦ 2年生が、ふく王くんをモチーフにした、畑で栽培した夏野菜をのせて『ふく王くんピザ』を作った。

⑧ 校長の発案で、職員室廊下に福島正則公の一生の足跡を展示する『まさのりストリート』を作った。

歴史の中心人物ではないため、なかなか資料がそろわない点が課題であったが、歴



まさのりすとーと

史民俗資料館学芸員、近藤博先生を招いて、職員が理解を深める中、このようにさまざまなアイデアが生み出された。

そんな活動が続ける中で、平成31年4月に堀川の柳橋近くに福島正則公の銅像を立てる計画があることを知らされた。堀川の工事を行ったのは福島正則公であり、名古屋の発展の基を築いたのは正則公であるとの考えから銅像を建立するとの話で、堀川ライオンズクラブの方々が本校へごあいさつにみえたことから話は膨らみ、除幕式で演じられる福島公を題材にした狂言に本校児童への出演のお誘いもいただいた。

⑨ 6年生による正則公を題材とした調べ学習を行い、5年生に向けて発表を行った。

⑩ 4年生が社会見学で訪問した福原分校で、ふく王くんカードを配り、福島正則公をPRした。

⑪ 5年生が、福島正則公の家紋白抜き十文字をモチーフに花壇をレイアウトした。

⑫ 6年生がキャリア教育の一環として、旧美和町木田にある芳春軒店主を講師に招き、ふく王くんをモチーフにした、ふく王くんまんじゅうを作って和菓子作りをおもしろさや難しさを体験するとともに、保護者にプレゼントしてお菓子作りの喜びを体験した。



ふく王くんまんじゅう

多くのアイデアにより、現在もProject MASANORIは、継続中である。

イ 親子ふれあい学級

継続事業として、毎年6月に行っている「親子ふれあい学級」では、地域の講師14名、アシスタント23名を招聘し14講座を設けた。講師の方の事前準備は入念で、講座にかける意気込みを感じることができた。また、どの講座も親子が真剣に取り組む姿は、とてもほほえましく、親子で共通の目標に向かって活動する機会になっていると自負している。

ウ 農業体験学習

こちらも継続事業として毎年、全校児童が学校近くの畑でサツマイモの植付と収穫を地域の農業委員さんのご指導で体験させていただいている。土に触れる経験が少なくなった今日、サツマイモの苗植えや収穫は、とてもよい体験になっている。

3年生は、サツマイモ以外にも郷土の農作物として有名なネギ作りを農家の方を講師に招いて体験した。また、2年生は、農業委員さんや見守り隊を招いて「感謝の会」を行い、地域の方々とのつながりを深めた。

3 評価と課題

地域に存在し、地域に支えられている本校にとって、逆に地域に向かって何かできることはないのか。そんな思いに駆られて、取り組んできたProject MASANORIであるが、さまざまなアイデアやそれへの反応、そして、現代にも息づいている福島正則公の業績等に助けられ、今や児童の口から「ふくしままさのり」という言葉が出る場面は珍しいものではなくなった。「福島正則公に親しむ」という、当初の目標は見えつつあると言ってよいと考えている。

今後は、どのようにして本校独自の学習として確立させていくか、安定して継続実施することができる内容に昇華していけるか、が課題であると考えている。